卒業式式辞

この春、社会人として広く世界に飛び立たれる卒業生、大学院修了生、さらなる学究の意欲に燃えて進学の道に入られる皆さん、ご卒業、ご修了おめでとう。皆さんのそれぞれの旅立ちにあたり、ひと言、餞の言葉を述べさせてください。

最初に述べておきたいのは、私自身、名古屋外国語大学の学長に赴任して四年、多くの皆さんと同じ時間を共有し、同じ道を歩いてきたという事実です。それだけに今年の卒業式は特別に感慨深いものがあります。

さて、今日一日、皆さんは、未来と過去のはざまにあって、嬉しくも悲しい一日を過ごされることでしょう。しかし明日からは、確実に別の現実が皆さんを待っています。そして明後日にはまた新しい現実が訪れ、そうして一週間が過ぎ、ひと月が経ち、一年、二年、十年と時が経過していきます。そのなかで改めて明らかになる真実とは、きっと次のようなものだと思います。すなわち、人生の九割は苦しみで、喜びは残り一割に過ぎないということ。現在の皆さんにとってこの言葉は、少し悲観的過ぎると感じられるかもしれません。しかし、英国のある劇作家は、一人の登場人物を介して次のようなセリフを吐かせました。

「人生は、病だ。一人の人間と別の人間を隔てる唯一の違い、それは、各人が患っている病のステージの差にすぎない」

(Life is a disease; and the only difference between one man and another is the stage of the disease at which he lives.)

しかし、私たちは病や苦しみを経験するために生きているわけではありません。たとえ生きてあることそのものが、苦しみであり、病であるとしても、私たちはその苦しみや病と闘って生きていかなくてはなりません。そして、闘いの方法は、人さまざまです。私が最近、しきりに考えることがあります。すなわち、人間とは、みずからの苦しみをコントロールし、これを軽減する術を備えたかけがえのない存在なのだ、ということ。そしてその最大の方法こそ、**忘却**なのです。

では、私たち人間にとって、忘却とはそもそも何なのか？ ここに、忘却をめぐる二つの対照的な言葉があります。

「忘却の早さと、何事も重大視しない情感の浅さこそ人間の最初の老いの兆しだ」

「忘れん坊は幸いである。なぜなら自分の犯した失策まで忘れ去ってしまえるから」

(Blessed are the forgetful, for they get the better even of their blunders.)

前者は、忘却を老いの徴といい、老いがもたらす情感の後退を批判しています。そして後者は、健忘症の人間をアイロニカルにではありますが肯定します。前者は、フリードリヒ・ニーチェの言葉です。

人間以外の動物は、明日の心配を抱くことはありません。ことによると人間は明日の心配によって生きる動物と言うこともできるでしょう。そして人間に与えられた一番の知恵とは、そうした不安を押しのけ、一割の喜びを、二割に、二割を三割に高めていくことのできる力なのです。その力は、自分の中にあり、同時にまた、自分の外にある。

いま私たちは、文字通りの意味で、人生百年の時代を迎えようとしています。しかもＡＩ(人口知能)の発達によって、将来の職業の質は根本から変化すると見こまれています。二〇三〇年には、週十五時間の労働で済むと予測する経済学者さえいます。これを後ろ向きにとらえるか、前向きにとらえるか。いえ、じつのところ、選択肢はありません。私たちはこれを、大きなチャンスの到来とみなして、新しい生活様式を探りださなくてはならないのです。なぜなら、ＡＩによる労働の代替から生まれる膨大な時間の九割が苦しみであるとしたら、それこそ人生は地獄でしょう。ですから、**このありあまる時間を、新たな創造的な時間に代えていく**、そのための準備を今から整えなくてはならないのです。

皆さんの前に延々と続く道のり、五十年、あるいは六十年、その気も遠くなるような時間を生きのびるために不可欠なのは、第一に精神の糧、わかりやすくいえば、**生きる拠りどころ**です。そして忘却とは、じつはその活力を生み出すためのエネルギー源でもあるのです。日常生活における苦しみを脇に追いやる力、忘却の力、そして忘却とともに新たに皆さんの人生を勇気づけてくれる新しい世界。これから長い人生を生きる皆さんに、できるだけ早い段階で、すぐれた芸術に接する機会を持ってほしいと願っています。絵画、音楽、映画、演劇、文学。皆さんの人生が無益なものにならないために、皆さんの苦しみや不安を取り除くために人類の文化的な遺産はあり、日々、それは蓄積されているのです。そしてその芸術を発見するための礎となるのが、教養です。身近な人々、遠い人々、世界の人々との語り合いをとおして得る知の楽しさ、人類に共通の精神的な糧、その一部をわがものとすることで人は真の「**世界人**」となり、真の「世界人」としてリスペクトされるのです。ですから、どうか**上手に忘却する技法**を身につけてください。むろん、世界には、忘却することを許されない数々の事実が存在します。具体的にそれが何であるかについてここで触れることはしません。それらは、おそらく皆さんが、大学で学んだ知識をとおしてすでに敏感に察知しておられることでしょう。しかし、無益な苦しみから自分を救い出す知恵だけは、みずからの力で手に入れなくてはなりません。心と精神が路頭に迷わないように。明日(あした)、皆さんには、**明日(あす)吹く風の中に立っていただきたい**のです。

そして最後にひと言、皆さんが今日別れを告げる私たちの名古屋外国語大学は、まだ歴史の浅い大学です。皆さんの活躍一つひとつが、私たちの大学の歴史を作り、その基礎を固めていきます。どうか、名古屋外国語大学に「学んだ」、そして「卒業した」という誇りを、いつまでも大切に胸に秘め、その自覚を持って生きていってください。そして私たち教職員一同も、皆さんが、この大学で学んでよかった、卒業できてよかった、と一生思っていただける大学であり続けるよう、限りなく努力を積み重ねていきます。

最後になりましたが、何より、皆さん一人ひとりのご健康とご成功、幸多き未来を祈って、学長の式辞とします。

二〇一七年三月二二日

名古屋外国語大学長　**亀山　郁夫**